おやじん
Vol.04
2017 12

OYAzine

親爺が作る、親爺のための、適当で、いい加減な雑誌

あなたの魂まで撮らせていただきます。

プロフィール写真・宣材写真・アーティスト写真から遺影まで。
今の旬なあなたを、人生をたっぷり生きた親爺が粋に撮ります。

編集後記

前号に続いて今号もお笑いの世界の人を取材させてもらいましたが、前号のはなわさんとテツａｎｄトモは共に紅白に一緒に出た仲で、互いによく知っているそうです。

ＣＤジャケットの撮影現場で初めて二人に会った時、とても謙虚で真面目な印象を受けました。それはきっとやることをきっちりやっている人間の自信の裏返しなのかもしれません。コンビ結成20周年記念関係のジャケット撮影とデザインを担当させてもらった時は、スタジオに早めに入って録画の現場を覗かせてもらいました。ちょうど「なんでだろう20連発」の録画中。何度かやるんだろうと思っていたら、一発で撮り終えてしまいました。二人の無駄のない動きに熟練したプロを感じました。最近は売り上げが落ちたり、視聴率が下がったり、人気が下がったりすると何でもすぐ変える風潮がありますが、彼らを見ているとやたら何でも変えることがいいわけではないと思いました。ちなみにマネージャーもデビュー以来同じ人が担当を続けています。このOYAzineもそうやって続けていきたいとは思いますが、飽きやすい性格なので変えたい誘惑と戦っているところであります。（島）

企画・編集・デザイン：島製作所　発行：島 隆志　記事中のクレジットがない写真：島 隆志
ご意見・ご感想は●mail:oyazine@shima-f.com　Facebook:OYAzine で検索
有限会社 島製作所　〒106-0032 東京都港区六本木 3-4-35　落合三幸ビル 2F　http://www.shima-f.com

一発屋のブルース

『テツandトモ』は今や国民的お笑い芸人と言っても過言ではない。トモがギターのメロディーに乗せて「なんでだろう～」とあるあるネタを歌いながら同時にテツが全身を駆使した独自のパフォーマンスを繰り広げる。その芸は多くの人を笑わせてきた。しかし最近はテレビに出る回数は以前よりも減り、一発芸人で終わったかのような扱いをされている場合すらある。

「なんでだろう～なんでだろう～なんでだ、なんでだろう～」

一発芸人と言われているのにまだいるふたり…

それは営業（イベントなどの舞台）の世界では他を寄せ付けないダントツの人気があるからだ。デビューして来年で20周年。今回はその人気の秘密を聞かせてもらった。

二人との出会いは彼らのCDジャケットの撮影とデザインの仕事であった。最初、『テツandトモ』が歌うの？と思ったが、元々歌手志望であった彼らの歌唱力は半端無く高く、あの「石狩挽歌」の作曲家である浜圭介氏が、お笑いをやめて歌手になれと言うくらいの惚れ込みようである。その時のCDも浜氏と作詞家の渡辺なつみ氏の名コンビが作った「泥の中の蛍」という渋いロック調の演歌であった。渡辺なつみさんも彼らのテレビでの歌声を聴き、その後イベント会場の楽屋に足を運び「あなたたちの曲の作詞をしたい」と申し出たそうである。

二人が出会ったのは大学時代、日大芸術学部演劇学科のクラスメイトとしてだった。ともに歌謡曲が好きで、歌うことが好きだったが、とくに親しいわけではなかったという。テツはミュージカル系、トモはダンス系のサークルと好みも異なる。しかし、クラスでカラオケなどに行くと歌が上手い二人にデュエットのリクエストが来るようになる。そこで二人は練習して「あずさ2号」などを歌うようになりクラスの人気コンビとなる。クラスメイトのリクエストで作られた即席コンビが結果として二人の後の人生の伏線となっていたことはこの時は知る由もなかった。

大学を卒業後、別々の劇団で活動していたが、ある時大学のクラスメイトの結婚披露宴で再び二人で歌うことになる。そこにたまたま現在の事務所の人も出席していて彼らはスカウトされる。二人は当然歌謡界に入れるチャンスと思っていたらしいのだが…。

しかし、事務所が彼らに望んだのは歌手ではなくお笑いであった。売れれば歌手になることだって夢じゃないとも言われた。そう言われても簡単にそうですかとは言えない。かなり悩んだ末にその世界に入る決心をするが、お笑いを目指していたわけではないから何をしていいのかわからない。最初の頃は漫才をやったりしたがウケない。そんな時にトモが「なんでだろう」を作曲し、これであるあるネタをやったらどうかと提案した。それにテツがあの独特な動きのパフォーマンスを加えることで「なんでだろう」が完成。苦し紛れの末の創作であったが、これがブレイクして『テツandトモ』は一気に人気者になる。二人に共通する歌を取り入れることでお笑いの世界で認められたのである。この独自のスタイルはお笑いの世界を知らなかったから逆に出来たのかもしれない。そして漫才ではたぶん成功していなかったと思うと二人は言う。

人気が出てきてあるお笑いコンテストに参加した時のこと。審査員のひとりである立川談志が二人のお笑いを見終わって、「お前らはここに出てくるような奴じゃない、もう帰っていいよ」と言い放った。会場は一瞬静まりかえったらしい。勿論これは談志ならではの褒め言葉であった。後で談志の楽屋に挨拶に行った二人に談志は言った。「わかってるよな、俺は褒めてるんだぜ。」あの辛口の談志が認めた数少ないお笑い芸人でもある。その談志が彼らのために

でもある。その談志が彼らのために歌詞まで贈っていて、25周年記念のアルバムにはトモがこの歌詞に曲をつけた1曲が入っている。

〝人を笑わせるのは一番難しい〟

彼らは営業の現場が多いので客は千差万別である。土日はファミリー向けのイベント、平日は企業のイベントに呼ばれることが多いそうである。難しいのは後者の企業向けのイベント。そこにいるのは40～50歳代の親爺が多い。（この雑誌の主な読者層でもある理屈っぽくて乗りの悪い一番タチが悪い客でもある）問題はそういう場にいるお客は『テツandトモ』を見るためでもない、お笑いを見に来ているわけでもない。多くは企業の記念イベントの余興である。その中で彼らを笑わせ、盛り上げなくてはいけない。芸人としたら拷問のような仕事である。立席で酒を飲んだり、食べたり、時にはコンパニオンがいる時もある。当然親爺はお笑いよりもコンパニオンである。一番辛かったのはパチンコ屋でのイベント。パチンコをやっている殺気だった人達の間を縫って芸をやるのである。「おまえ達が来たら急に出なくなった。ギャラ分の玉を出せ」などとやけくそな嫌みも言われる。

そんな経験を繰り返しながら営業を続けて逞しくなっていくわけであるが、それは同時に芸のマンネリ化にもつながる。どうせやるなら自分たちがおもしろいと思うことをやりたい。それで40代になってからちょっとスタイルを変えた。イベントごとにネタを変えるようにしたのである。特に企業向けのイベントでは、公演直前にヒアリングし、短時間の間に日常のあるあるネタを作って仕込む。かなりの想像力と集中力がいる。例えばその企業の社訓を短時間でまる暗記してネタに仕込む。すると毎朝朝礼で言ったりしている身近な社訓がネタとなって登場するわけだから、みんな「えっ、なんでこんなこと知っているの？」とびっくりする。さらにそれがあるあるネタでオチになっているから一気にウケることになる。ある銀行のイベントでは「なんでだろう～なんでだろう～なんでだ、なんでだろう～3時ぎりぎりに来る客…」とやった。銀行員にとっては何で閉店間際に来るんだよ、と普段思っていてもなかなか口には出せないあるあるネタだからこれがウケるのである。限られた人にしかウケないネタであるが、逆にその人達にとったらサプライズとなってどっとウケるのである。

それ以前は自分たちの持ちネタを披露するスタイルだったが、このスタイルに変えてからは企業の間でも評判を呼び、今では引っ張りだこな状態らしい。取材した月の営業本数は22本と言っていた。

「なんでだろう」は実は一発芸ではなく、スタイルは同じでもお客やその現場に合わせてネタを作るので、ある意味毎回新ネタをやっているようなものなのである。続けてきた盤石な「なんでだろう」というベースがあってこそ出来るフレキシブルなネタの創作がそこにはある。

二人はおそらく「なんでだろう」とともにこれからも「続ける」ことをつづけながら自分たちの芸を育てていくのだろう。ちなみにトモがいつも弾いているあのギターは元々はテツのギターである。テツが中学生の時に3万円で買ったギターらしい。二人はこのギターの音がどんな高級なギターの音よりも気に入っている。壊れるまで使い続けたいと言っていた。ギターも彼らと共につづくのである。勿論彼らのトレードマークである赤と青のジャージと共に。（あのジャージは特注で1着10万円する日本一高級な？ジャージである。）

（島 隆志）

バター・スイート・サンバ

バターをたっぷりと塗ることに背徳感に似たうしろめたさを感じるようになったのはいつからだろう。子供の頃からバターが染み出すくらい塗ったトーストが好きだった。バターをたっぷり使って作られたクロワッサンやブリオッシュが好きだった。近所の札幌ラーメン専門店（後に、札幌とは全く関係ないラーメンチェーンだと知ることになるのだが）のメニューにあった「バターラーメン」に憧れた。「サッポロ一番塩ラーメン」にバターを落とすとうまいとパッケージに書かれているのを読んで、親にせがんで入れてもらった。

野菜が苦手だった私は、小学校の家庭科の授業で作った「ほうれん草のバター炒め」を食べて、野菜なのに美味しいと感動したのだが、それもバターの風味のおかげだったのだろう。ステーキの上に乗っているバターも、ホットケーキの上に乗っているバターも愛おしかった。ロイヤルホストのホットケーキには、まるでアイスクリームのような大きなドーム状のバターが乗っていて、それを見るだけでワクワクしていた。しかし、いつの頃からか、私は人前でバターをたっぷりと使うことが恥ずかしくなっていた。同時に、トーストにたっぷりバターを塗るという作業がひどく面倒になって、トーストを食べるのも億劫になって、当時、母親がどこからか手に入れてきたバウルーのホットサンドメーカーで作るホットサンドに夢中になってしまう。

バター犬の存在を知ったのは、もちろん、谷岡ヤスジのマンガからだが、中学生の頃に、何かの小説で、ギャグではなくバターを塗った陰部を犬に舐めさせるマダムが登場するシーンを読んだのも覚えている。同じ頃、父親が何故かお姉さんのいるクラブに私を連れて行きたがって、そこで、氷の入ったグラスの上に載せられたレーズンバターに出会う。それを、キツい香水の匂いをさせて胸元の開いたドレスを着たお姉さんが、口に入れてくれるのだ。味なんか分からない。ひたすら油っぽくて、私はそれが気持ち悪いのに気持ち良くて、自分がバターを好きだったかどうか分からなくなっていったのかも知れない。レーズンバターを心の底からうまいと感じたのは、大学生になって一人暮らしを始めてからだ。スーパーに普通に売っているのを見て驚いて買ってきて、家で一人で食べるレーズンバターはおいしかった。バターも好きだがレーズンも大好きな私なのだから、それまで苦手だと思っていたことの方がおかしかったのだ。しかし、そうなってからも、どこかで「レーズンバターが好き」というのは恥ずかしいことだという意識があった。同様に、パンにバターをたっぷりつけて食べるのが好きだという事実も、自分の中に封印した。付き合っていた彼女と一緒にトーストを食べる時も、あまり沢山バターを付けないように注意していたから、何だかトーストが美味しくなかった。本当は、クロワッサンにだってバターを塗りたかったけれど、何故か我慢していた。

吉田秋生の「河よりも長くゆるやかに」というマンガで「あんバタ」という食べ物の存在を知った。フレンチトーストに業務用マーガリンとこしあんを挟んだ過激な食べ物で、マンガの中では罰ゲーム的な扱いになっていた。そして、秘かにファンもいて、彼らはそれを隠れて食べるため「隠れあんバタ」と呼ばれ、見つかると「踏みあんバタ」を強要されるという。それを見た私は、「しまった、うまそうだ」と思ったのだった。その頃、既に私は、トーストにバターを塗った上からジャムを塗るとうまい事を知っていたから、「あんバタ」の味も用意に想像がついたのだ。しかし、実物を見ることはなく、やはり、バターというのは余り表立って使うものではないのだろうと諦めていた。その頃にはレーズンバターも下火になっていたし。

そして、「あんこ」というのも、何故か男性には忌み嫌われることが多く、大つぴらに好きだと言いにくいものだった。その頃の私は、ちょうど「大福餅」に凝っていて、その数年後には、生涯のベストとも言える竹隆庵岡埜の「こごめ大福」に出会うのだけど、それだけに「大福、うまいっすよね」なんて事は言えなかったのだ。平成になって数年経ったある日、お土産に麻布十番の天のやの「小倉トースト」をもらった。それは、上品な「あんバタ」だった。忘れた頃にやってきた衝撃だった。今でこそ、絶品の「玉子サンド」の店として評判の天のやだが、当時の人気メニューは「小倉トースト」だったのだ。しかし、それでもなお、「えー?」という人が多かった。キワモノメニューだと思われていた。何故だろう。昭和から平成の10年代くらいまで、日本は、バターとあんこを忌み嫌っていたのだ。そしてファンは、まるで「隠れあんバタ」のように、こそこそと自らの好みを発散させていた。現在の、糖質は悪だ、脂質は敵だという時代でも、当時ほどの嫌われ方はしていないと思う。それは、バターを背徳的だと感じていた私だからというわけではない。

事情が変わってきたと思ったのは、10年ほど前。ある女性の家に遊びに行ったところ、当たり前のように、バターを挟んだクロワッサンが出てきたのだ。そして、丸ごと揚げたカマンベールチーズ。こんなものを、お客さんに出していい時代が来たのかと思った。噛むと、サクッと軽い口当たりと一緒にバターが染み出すクロワッサンのうまさに泣きそうになっていた。いつの間にか時代は変わっていた。テレビ東京の「侠飯～おとこめし～」というドラマでは、生瀬勝久演じるコワモテの男がトーストを焼く時「先にバターを塗ってからトーストして、焼けたらもう一度バターを塗る」と言うのだ。「バターが染みてうまい」と。驚愕だった。友人に、「そういうバターの塗り方はありなのか?」と聞いて回ったら「あれ、おいしいよね」「よくやってるよ」「普通じゃない?」などという返事が返ってくる。やってみたら、涙が出るほどうまい。しかも、パンが焼き上がってからバターを塗る時間が短くなるから、パンが冷めない。これが正しいトーストの食べ方だったと、バターを塗ることにうしろめたさを感じていた昭和の私は、ついに大人になったのだ。今や、井村屋には「あんバターホイップ」というパンが売っている。ポンパドールには「あんバターサンド」があり、東京駅ガーデンハウスカフェの「あんバターサンド」は午後には売り切れる人気だという。これは私の時代が来たというものなのに、どこか釈然としない。お前たち、いつから、あんバタが大好きになったんだ?

（納富廉邦）

筆者プロフィール（notomi yasukuni）
昭和38年佐賀市生まれ。立教大学在学中よりフリーライターとして娯楽全般をフィールドに執筆、現在に至る。東京ハイボールズのリードギター担当。近著「40歳からのハローギター」（幻冬舎）

ある日の記憶

朝4時に起きて、喪服に着替えクルマで西に向かう。普段はプリウスを礼賛している私だが、一日で往復７００kmを走るとなると、ＢＭＷを選んでしまう。社会人として世に出た時、同じ会社の同じ部署に同期入社した友人が急逝したとの知らせを受けたのは前日だった。亡くなる二日前には元気でゴルフをしていたそうだが、急性くも膜下出血で帰らぬ人になった。知らせを受けた時は、香料だけは知人に託し、通夜も告別式も失礼するつもりだった。最近では疎遠であり、葬儀の場も東京から遠く離れていたからだ。でも、夜寝る時分になってもなんとなく落ち着かず、仕事を放り出して告別式に行くことにした。

東名は順調で時間に余裕が出来たので浜名湖のサービスエリアで休憩を取った。精神に余裕の無い時にロング・ドライブをする羽目になると、メルセデスからＢＭＷに買い換えたのは失敗だったと思うようになる。

告別式には大勢の人が集まり、驚くほどたくさんの花が供えられ、今もし自分が死んでもこんなにたくさんの供花はこないだろうな、と思った。残された奥様は沈痛な面持ちで、でも子供たちはまだお父さんが亡くなったという事実を受け入れられていない様子だった。私も、焼香を済ませ棺を見送ってもまだ、その友人の死という事実を受け止められずにいた。だから涙も出なかった。

出棺を待つ間ずっと、近くに停まった参列者の黒塗りのレクサスがアイドリングを止めなかった。環境技術を売り物にしている自動車メーカーの役員車だ。なんというだらしないことか、と腹が立ったが、告別式の場で喧嘩をするのは慎んでおいた。

棺を見送った後、普段着に着替えて、近くの病院に見舞いにいった。夏に同じ会社の後輩が急性脳梗塞で倒れ、幸い一命は取り留めたものの右半身に障害が残り、リハビリに取り組んでいる。その後輩は自分が倒れるまで〝自分が働きすぎとか、ストレスが溜まってるとか、全然気がつかなかったっすよ。だって、同じ会社にはもっと働いてる人もたくさんいるじゃないですか。〟と言った。あるひとつの求心力に吸い寄せられると、人は自分がどれほど無理をしているのかが見えなくなってしまうのだ。ナチスや大日本帝国陸軍じゃあるまいに。それにしても、30代40代の働き盛りが次々に倒れるなんて、どういう会社だ?

病院を出ると一気に東京までクルマを走らせ、自宅に着くとタクシーに乗り換えリッツ・カールトンに向かった。金沢から来ている旧友が泊まっている部屋に行くためエレベーターに乗ろうとすると、見目麗しい女性の従業員に呼び止められ、どのようなご用件ですか?と訪ねられた。多くの人が乗り降りしているエレベーターの前でそんな尋問を受けているのは私だけだ。結局、友人にレセプションまで迎えに来てもらうまで、私は見張られていた。彼女の目には私が余程みすぼらしく映ったとみえる。

リッツ・カールトンの部屋で夜景を見ながら男4人で再会の祝杯をあげる。なぜかバブルの頃に赤坂プリンスで飲んで騒いでいたころのことを思い出した。

ほどなくして階下のビルボード東京に移動。ゲソ天とこち天をワインで流し込みながらマイケル・フランクスのライヴ。この店ではゲソ天とこち天の盛り合わせを〝シーフードのフリット〟と呼ぶ。シーフード・フリッターかフリット・ドゥ・ラ・メールじゃないのか??そんなことに苛立ちながらマイケル・フランクスを聴いていると、マイケル・フランクスが実はモーズ・アリソンの物真似なのだと気がついた。

ライヴが終わると男四人で階下に降り、蜂蜜入りのソフト・クリーム。その後ラウンジでペルノーを飲みながらクレディ・スイスのダイレクターだというアメリカ人とご対面だ。最初は適当に喋っていたが、７００kmのドライブと2本のワインがしっかりと効いてきて、ラウンジのソファーで居眠りをしたら、ホテルの従業員が慇懃無礼に私の肩を、トントンと叩いた。

これは10年前、２００７年10月5日にmixiに書いた日記です。もはや毎日何をしていたかなど正確に覚えていられない年齢になってしまったのに、何故かこの日のこと、この日に感じたことは、今もはっきりと記憶に刻まれている。告別式で見た亡き友人の子どもたちは、もう成人したことだろう。彼らの心の中に、お父さんは生きているだろうか。

（斎藤 陽）

筆者プロフィール（saito yo）
昭和38年、東京生まれ。高校大学時代を通じ雑誌ロッキング・オンに執筆。卒業後自動車会社勤務、零細運送会社社長を経て、現在商社シンガポール法人勤務。

夜にする、ウイスキーの話

妖しい赤い光に照らし出されたウイスキーボトルが美しいバー・アーカムの店内。500種類以上のウイスキーがある。

四半世紀ほど属したマーケティング関連の組織から足を洗い二〇一五年から、僕は一人で独りよがりのウイスキー・バーを始めた。よくお客さんに「趣味でバーテンダーをしていますよね」って言われ、その度に「独善的ですよね」って言われている気がして、少しばかり沈む日々を過ごしている。

ウイスキーのことは好きで嫌いだ。シンプルに好きとか嫌いと言えるほど、甘くはなくなってしまった。

ウイスキーと付き合いだしたのは、ソープをトルコと呼んでいて、ディスコは中高生が朝まで時間をつぶす場所だった頃で、その頃、ウイスキーは僕にとって、いい女だった。

山下公園のベンチの上でも、西麻布のマハラジャでも、帝国ホテルのレインボーラウンジでも、何処に行っても、ウイスキーは、その場に相応しかったし、凛としていた。それに、ウイスキーは恭しく扱っても、どうでもいいように乱暴に扱っても、いつも美味しく、優しく包んでくれた。けして、ワインのようにトゥールダルジャンじゃなくちゃ嫌だとか、私に合うのはマリア・カラス風のパイ包み焼きだけよとか言うことはなかった。

でも、変わってしまった。

ワインの真似をして、頻繁にテースティング・イベントを開催するようになったし、日本のバーでは、ストレートでオーダーすればショットグラスやロックグラスではなくテースティンググラスでサーブされるようになった。テースティングって行為は、私の価値があなたに解るのかしら？あなたは私に相応しいレベルなの？と自分と相手を格付けすることだ。自分や相手にランク付けして高慢に振る舞う女性も、逆に卑下する女性も好きではない。

それに、ウイスキーはやたらと「歴史」とか「伝統」っていうフレーズを使うようになった。もし女性が自分の家柄とかバックグランドを執拗に話すようなら、自身の魅力によほど自信がないだろうと受け取るし、そういうものに対してコンプレックスがあるのだろうなと思ってしまう。

そもそも、ウイスキーは「歴史」とか「伝統」の真逆に位置していて、「革新」や「進化」という言葉こそが相応しい酒だ。一般に飲まれている酒のジャンルでウイスキーが一番、新しく生まれた。今のように琥珀色のウイスキーが誕生してから、まだ二百年そこそこしかたっていない。ウイリアム・グラント&サンズ社が周りに、そんなもの誰も飲まないと言われる中、オフィシャルで最初のシングルモルトを発売したのは昭和三十八年で、まだ五十年そこそこしかたっていない。日本人が普通にシングルモルトを飲みだしたのは昭和五十年代に入ってからだ。

スコッチウイスキーがアメリカンウイスキーよりもトラディショナルに見えるのはマーケティングだ。実際はジョージ・ワシントンが当時、世界最大のウイスキー蒸留所を稼働していた頃、スコットランドでは山奥で密造人達が、隠れながらウイスキーを蒸留していたに過ぎない。アメリカンウイスキーがケンタッキー発祥というのもマーケティングだ。一九二一年から十二年間施行された禁酒法の間にアメリカ各地の都市部の蒸留所は解体され別の用途に使われたが、田舎のケンタッキーでは蒸留所がそのまま放置されていた。禁酒法が廃止されると、残っていた蒸留所でウイスキーが再び製造され、ウイスキー業者達はケンタッキーでアメリカンウイスキーが誕生したという物語を作り出した。

最近、一番苦々しいのが、日本を代表するウイスキーの専門家とか言われる人たちがアイリッシュウイスキー、スコッチウイスキー、アメリカンウイスキー、カナディアンウイスキー、ジャパニーズウイスキーが世界の五大ウイスキーと呼ばれると言い出し、広めていることだ。日本のメディアでは当然のように世界の五大ウイスキーとして紹介されるようになってしまった。もちろん、こんな戯言を言っているのは日本だけだ。大した根拠もないのに「私は港区の五大美人の一人って言われているの」と言って、優越感に浸っている女性がいたら、こっちが恥ずかしくなってしまう。そして、これもマーケティングだ。この五大ウイスキーの五か国とは日本の酒類メーカー最大手が販売しているウイスキーの生産国ということに過ぎない。元々このメーカーは薬事法がなかった時代、六十人の医学博士を囲い込み、彼らに自社の合成ワインの、ありもしない効能を広めさせ、成功したことによりウイスキーを造り始めた。

脂ぎった商人が、偽りの権威でウイスキーを飾り立て、辱めても、僕はウイスキーを信じている。ウイスキーは、まだ産声をあげたばかりで、これから進化する酒だ。

今、一番ウイスキーが製造されている国がインドだ、そしてインドのウイスキーの消費量は日本の十倍を超える。市場が一桁違えば、何かが起こるはずだ。現段階でもインドの廉価版ウイスキーもラグジュアリーウイスキーも日本産ウイスキーとそん色はない。そしてアメリカだ。四、五年前までアメリカでは稼働している蒸留業者は九社にすぎなかった、それが今では急激な勢いで蒸留所の数が増加し、千か所を超えようとしている。最近は週に一個のペースで蒸留所が建てられていて、コロラド州でさえ五十を超えた。日本の蒸留所の数と二桁違う。蒸留を始めた若者たちは、過去の因習に囚われず、使用されていなかった原料を用いたり、今までにない製法を試みたりして、新たなステージに向けて邁進している。

これからだ、本当のウイスキーを飲めるのは。

（与良 素通）

筆者プロフィール（yora motomichi）
昭和40年。東京生まれ。株式会社電通を退社後、2015年よりBAR ARKHAMを開業。
https://www.arkham.company/

朽ち写し ⑤

赤い椿白い椿と落ちにけり

河東碧梧桐（かわひがしへきごとう）

満開の花は美しい。それは短い生の頂点であり、その一瞬を越えると花は一気に死に向かう。その儚さが人を惹きつける理由でもある。しかし、死に向かう過程で見せる花の姿もまた美しい。満開の花が正の美とするならば、朽ちていく花の姿には負の美がある。多くの椿は満開を過ぎると花びらを散らさず夢（がく）だけ枝に残して花ごと落下する。落ちた椿は春の雨に打たれながら地面で咲き続け、やがて朽ちて土に還る。その姿は人の目には残酷に写るけれど、それゆえに椿は他の花とは異なる儚さを感じさせる。

女優 伊澤恵美子と散歩する

昭和な散歩

その五 野毛町

横浜の野毛山は実家が近いこともあり馴染みのある場所だった。そこにある野毛山動物園は小学生の遠足で行った覚えがある。今回散歩した場所は野毛山から坂を下ったJR桜木町と京急日ノ出町の間にある野毛町の飲み屋街。

「みなとみらい」から歩いて行けるくらい近いが、開発された清潔感溢れる「みなとみらい」とは真逆な泥臭い世界が広がる。ここには昔からの横浜が色濃く残っている。高校生の頃はバイクで通過するだけの街だった。親爺になってから実家に帰る途中にふと気になる風景があって車を停めて歩いてみた。

それは都橋商店街という大岡川のカーブに沿って円弧状に建てられた2階建ての飲み屋街だった。調べてみると1964年、東京オリンピックの年に周辺の露店や屋台を集めて出来た商店街らしい。当時は物販の店もあったが現在は飲み屋でほぼ占められている。特に2階は川に向かって入り口がずらっとならび、ドアには「会員制」の看板を掲げている店がいくつかあり一見さんは入りづらい雰囲気がある。聞くところによると野毛の飲み屋街に多くある会員制の店はゲイの店らしい。実は野毛町一帯がゲイの世界ではゲイ・タウンとしてよ

▲「旧バラ荘」という物語がありそうなBARの前で。

▲よそ者を監視するかのようにじっと見る片目の猫。

▲スナックは平成の今でも昭和である。

▲閉店しているのかお休みなのか???

▲路地裏には雨が似合う。

▲都橋商店街の2階にて。左側に大岡川が流れる。

く知られた街だった。風俗店やラブホテルに加えて居酒屋、中華料理屋、焼き肉屋、バー、そして最近密かに人気のスナック、それらがこの街独特の空気感を作り出している。高校生の頃に友人と初めてポルノを観た映画館やエロ本を買っていた古本屋がいまだに残っていたりもする。横浜のイメージというとやはり港や最近は「みなとみらい」を浮かべがちだが、この妖しくも猥雑な飲み屋街も横浜である。僕はやっぱり古い横浜の方が性に合う。２０２０年、たった２週間のために各地でさかんにお色直しが進んでいるけれど、この街はこのままがいい。ここも横浜なのだから。（島）

伊澤恵美子プロフィール
９歳から舞台に上がり、モデル・女優として活動。映画「子宮に沈める」主演、日タイ国際共同製作映画「アリエル王子と監視人」主演他ドキュメンタリー映画「ちいさな、あかり」企画など多岐に渡り活動中。熊本市ＰＲ特命大使。
FB : izawaemiko Insta : emikoizawa

バード電子のバードはチャーリーパーカーのニックネームだった

その5　番外編

その話はつづく

【イヌゴロシのヤマブチ】

高校に入学するとクラスにヤマブチ君がいた。ヤマブチ君は留年生だった。

彼には友達がいなく「イヌゴロシのヤマブチ」と呼ばれており年齢は不詳で、見た目は怖かった。

僕は彼が本当に犬を殺したのかが知りたくて接近した。

だから他の生徒よりは親しい関係だった。

ある昼休みにヤマブチ君に「タバコを吸いに行こうよ」と誘われてつき合った。

彼のバイクに二人乗りをして、『人石（ジンセキ）の沼』へ向かった。

人石とは、人造石油の略である。第二次世界大戦末期にドイツの技術で石炭から石油を作る事業があり、高校の近くには実験工場の施設が廃墟となって残っていた。

人石の沼は、その工場跡地の窪地に水が溜まってできた場所で、沼の真ん中には、コンクリートの塔が立っていた。

それは、まるで湖に浮かぶ要塞のようだった。人造石油工場は終戦と同時に閉鎖され設備は放置された。本部の立派な建物はそのまま残り、後に自衛隊の本部になっている。周辺に点在した工場は朽ち果てるまで放置されたが、街の人にはジンセキの言葉は染み付いていた。

沼に到着するとヤマブチ君は「プハーッ」っとタバコをふかして「峰って軽いよな」と言った。

その時だ、草むらがガサガサと鳴り、中から黒い犬が出てきた。すぐにマスブチ君は立ち上がった。

イラスト：たかしまてつを

僕は、「いよいよだな」と思った。

つづく

【運命の分かれ道】

編集長の島さんに「斉藤さんは物持ちがいいね」と言われ自分のクローゼットを開けてみると、いすゞジェミニのカタログのバインダーがあった。開いてみると40冊ぐらい。

引越しの度に悩んで結局捨てられずにいたものだ。

いすゞジェミニは、自分が経営する会社の営業マン用も含めて6台は購入している。

若い頃は走りにはあまり興味が無かったので、ドイツ的なデザインが好きで選んでいた。

何年かして本物のドイツ車が欲しくなり、ワーゲンゴルフの購入を検討していた。

自動車雑誌を眺めていたら『ワーゲンゴルフよりも安い外車』としてイタリア車アウトビアンキY10が紹介されていて、それを買ってしまったのが運命の分かれ道となった。以来ラテン車好きになった。

Y10は、とてもよく壊れる車で、毎月必ず故障していた。20ヶ月間所有したうち整備工場に入っていたのは6ヶ月にもなった。

最後の日、近所を走行中にアクセルを踏み込むと「ボキッ！」と異音が鳴り、アクセルが戻らなくなってしまった。足先を使って戻そうとしても、バネのように引き戻される。僕はアクセルを踏みっぱなしの状態で第3公園入り口門めがけて猛スピードで向かっていた。

慌ててギアをニュートラに入れブレーキを踏みつけた。

キイイーーーーーーーー！

ゴーーーーーーー！

死ぬかと思った。

つづく

【味の薄い中華屋】

私は1978年から1984年までTVを見ておりません。本当です。

ニュースもドラマも何も見ておりません。当時は、TVを所有しない一人暮らしの人間は少なかったと思います。

TVが設置してある食堂ではTVが見えない席を選び、家電屋ではTV売り場を避けて生活しておりました。

アパートの近くに中華屋がありまして、味が薄くて不味いのですが、週に2回も通うと慣れてしまいました。

あの日、中華屋でTVに背に向けて味の薄いラーメンを食べていた時です。

背後からTVの音が聞こえてきました。

「北海道、●●市で殺人事件です。駅前の喫茶店わーげんで…」それを聞いて驚きました。

わーげんは、高校生時代に通っていた店でした。マスターとも親しくジャズレコードを貸借りをする程の馴染みのお店でした。振り返ってTV画面を見ると…他のニュースに変わっておりました。

7年間でTVを見たのはこの時だけです。チンピラがチンピラを刺し殺した事件でした。

ある日、その中華屋の主人が僕のアパートにやってきました。出前は頼んだ覚えはありません。

主人は真剣な顔で「女房が家を出たんだけど、何か知らないか？」と尋ねました。

僕はハッとしました。心当たりはある。奥さんはどこかの男と逃げのだと思いました。

それは、奥さんが退屈だと話していたのを聞いた事があるからで、旦那に飽きたのだろうと思いました。

でも、そんな事よりも中華屋のご主人が何故、僕のアパートを知っていたのだろう。

気になります。

つづく

【冬山をなめるなよ】

198×年12月31日に八ヶ岳の赤岳に一人で登った。

尾根道の脇に腰掛けて休憩していると「おい！一人じゃ危ないだろ」と知らない男に叱られた。

僕はそのまま硫黄岳に登り下山して山小屋に入った。

すると、さっきの男がいた。

「どこに行って来たんだ！」

「硫黄岳ですよ。明日は赤岳に登るので」と言うと男は「冬山をなめるなよ！」と言った。

男は明日の赤岳アタックにそなえ山小屋で休んでいたようだ。

「休みすぎだよ」とは言えなかった。

元旦の朝、僕は予定通りに地蔵尾根を新雪をかき分け登頂し、下山していると、あの男が辛そうに登って来た。

体力に頼りすぎた男で普段の生活も根性と忍耐で生きているのだろう。単独行は無理なタイプだ。

男が「山頂はどこなんだよ」とやたら偉そうに聞くので親切に教えてあげた。

「まだまだ、先ですよ」「ここからが地獄です」

つづく

【宗教の話をしよう その1】

アパートでジョン・コルトレーンを聴いていたら色白の男がやってきて「あなたは幸せですか」と言った。

男を部屋に入れ、実家から送ってもらった喫茶わーげんのオリジナルブレンドをドリップし男に勧めた。

色白の男の話は「今度の日曜日に映画の上映会があり食事付き無料で会場には女性も多い」という内容だったと思う。

日曜日になり嫌がる友人を連れ指定の会場に行った。

会場は畳20畳ぐらいで上映は旧式の8ミリ映写機だった。

上映会「羅生門」黒澤明

映画が終わり『肉の入っていないカレー』をご馳走になった。食べている間中に何度も「幸せですか」と尋ねられ帰宅した。

型が古い映写機で見た羅生門は暗く、肉無しカレーの影響もあって、幸せのはずが不幸な気分になってきた。

翌日、アパートにまた色白の男がやってきた。

「いかがでしたか？」

曖昧に答えて帰ってもらうと翌週も色白の男はやってきた。

「幸せですか」

これはヤバイな。と思った。

つづく

（斉藤安則）

筆者プロフィール（saito yasunori）
昭和35年、北海道生まれ。株式会社バード電子代表取締役。23歳で電子部品設計製造の会社を設立。18歳の時にロックファンをやめジャズファンになる。高柳昌行の晩年に永くファンであった事を告白、2年間ライブに同行し、記録用にビデオ撮影を行う。現在は高柳昌行専門のレーベル）INYADISCを運営。不定期に未発表音源のCD化を続ける。

熊本のカメラマンの日々

ランチBOXの仁しゃん

仁と書いて〝ひとし〟と読む。彼の親父が昭和33年、来訪された陛下の一字を頂いて付けた名前だといっていた。

仁しゃんとは小学5年生の時からの付き合いだ。二人とも勉強はできる方ではなかったが仁しゃんは特別だった。勉強は一切やらない。中学の期末テスト等、名前だけ書いて1番で提出し体育館で遊んでいた。得意なのは体育の成績だけだった。私は田舎の中学から熊本市内の中学へ転校して私立高校へ進み、仁しゃんは中学を卒業すると市内の大きなホテルへ就職した。

お互いに連絡を取ることもなくそれぞれの生き方をして20年が経ち、阪神大震災の年に私は東京から熊本に帰り、カメラマンとして開業の準備をしていた。

撮影：筆者

ある日、路地を車で走っていると前方に黒系のファションにパンチパーマの男がゆっくり自転車のペダルをよたりながら踏んでいる姿が見えた。瞬間にヤクザだ!-と思いながら気をつけて通り過ぎようとチラッと見ると見覚えのある顔だった。

仁しゃんだ!ヤクザになったんだと思った。「仁しゃん!」と声を掛けると一瞬振り向いた後「藤田か?!」とすぐにわかってくれた。今、ビジネスホテルの料理長をしていて、これから仕事に行くところだからコーヒーでも飲まないか?と誘われ、お互いの話をしているうちに20年間の空白はすぐに埋まった。仁しゃんは22才の時一つ年上の今のかみさんと知り合い、家族の反対を押し切って結婚したといっていた。16才から働いていたホテルには理不尽な先輩がいて、ホテルで働き始めて3、4年経ったある日、先輩から「レンジの中の卵を取ってこい」と言われ、レンジのドアを開けると卵が爆発して熱せられた中身が顔に飛び散った。意地の悪い先輩の悪戯だった。ついに我慢の限界を越え、先輩を突き飛ばして馬乗りになって殴った。結果そのホテルは辞めたそうだ。

仁しゃんは5人兄弟の末っ子で、祖父は桶職人で父親も後を継いだが、仁しゃんが生まれた頃には安いプラスチック製品が出回り、木の桶は売れなくなって家業は傾き、父親は酒におぼれてますます貧乏は加速したという。それでも小学校や中学の時は陽気で貧乏臭さは微塵もなかった。ただ、貧乏はしたくない、旨いものを腹一杯食べたいと料理人の道へ進んだそうだ。最終的に仁しゃんは勤めていたホテルの業務縮小のあおりを受けて退職し、私の開業と同じ年に小さな弁当屋「ランチBOX」を開店した。

立地条件の良さも幸いし、おばちゃんと二人で始めた店は軌道に乗り、パートも3人に増え、さらにボーナスも出せるほどになった。しかし、周辺のビルや橋の工事が終わって工事関係者のお客さんが去り、裏にあった看護学校も移転し、その繁盛している様子を見て同業者が280円の弁当屋を立ち上げ、さらに周辺に弁当屋が増え、そのせいで売り上げが一気に落ち込んだ。

ランチBOXの米は冷えてもおいしく食べられるように粘り気のあるやや高い米を使っている。ご飯大盛りでも値段は同じ。弁当一個からでも配達する。手作りが基本なのでほとんど保存料を使ってない。それでもやはりお客の何割かは安い方の弁当屋に流れた。開業した頃は、日曜休日だったが、客が減りだしてからは日曜返上で午後の2時までやっている。朝は午前2時には起きて3時過ぎには厨房で働いている。隣の病院の売店に弁当を納めているせいで、正月の元旦だけが休みだ。時々遊びに行くと、「飯、食ったか?」と云ってカレーライスを御馳走してくれる。

最近は、何十年も下を向いて調理しつづけていたせいで、首が下がったまま上がらないらしい。私が値段を少し上げたら?とか総菜の品数を減らしたら?とか言ってみるが頑として応じない。

仁しゃんは、自分の事を職人という。仁しゃんを見ていると、職人というのは、味とかにこだわる以前に、やらないとどうしても気が済まない人の事を言うのだと思った。

（藤田 和男）

筆者プロフィール（Fujita Kazuo）
昭和34年熊本市生まれ。福岡、東京でカメラマン修行の後熊本市でフリーカメラマンとして独立。
競馬歴は約20年。JRAに奉納した額はおそらく税金を上回る。

fなグラビア

最近雨が降ると事務所の窓から階下の歩道を行き交う人達を撮る。と言ってもみんな傘をさしているから顔や体はちゃんとは見えない。雨の中を移動していく様々な傘の動きに惹かれて撮り始めたのだが…。

足早に歩く男傘、スマホを見ながら歩く女傘、ランチ時は色とりどりの傘が重なり合って移動していくOL傘など、傘の下にいる人によって様々な動きをする。大小の傘が付かず離れず移動していく親子傘などは微笑ましい。宅急便の兄貴達だけは雨の中でも傘をささずに急いで台車をころがして荷物を運ぶ。最近はビニ傘が多いけれど、こうやって撮影してみると意外といろいろな傘があるものだと思う。

しかし、撮影していると脚フェチゆえに、女性の後ろ脚の脹ら脛に目が行くようになった。雨の中を歩く女性の脚には湿った色気が纏わり付いている。雨の日の傘の撮影は次第に女性、さらにはハイヒールを履いた女性に絞られていった。

雨の日の情景を撮るつもりで始めた撮影が、いつのまにか傘と脚の撮影に変わった。そして雨の日がちょっと待ち遠しくなった。（島）